

養育日記の中より

速水信

何くれとなく拾ひあつめかい綴りし日記を見やれば兒等が生ひ立ち様のあり／＼として其心のはたらきざまなどおかしき中にもいひしらずをしへをうくる事のみなり。

四十一年一月元旦 長男の健一は四ツになりました。今來た初刷附録に清少納言が捲簾圖があります、健「母様！此おかめ、何して居るの？」と「きいもおはらず右手を舉げて「健、テケテン」。おほかた昨夏のお祭にお神樂で見たのでせう。四ヶ月前の記憶をかくまでの程度に喚起します。

同三日 祖父様のお家へ御年禮のまゝ泊り込み其日祖母様が何かお竈のお話を下女共となさつたさうで、すると側から健「うちの母様、へちいや」と、皆其所以を解しませぬでした。母は後に是を聞いて思はず失笑、多分奮騰瓦斯を引いた爲

古い竈を賣拂いまし のをどこかで見て居て聯想したのでせう。

同十八日 大井町なる吉川のお婆様がわざ／＼健坊のお世に御入來早速お供して京濱電車に乗る隨分長い電車——まるでボギー車のやうな「婆、ボギー車って何？」健「そんな大きな癖に知らないの？」大きい人は皆萬能の人と信仰して居ります。

同廿三日 二宮先生幼時讀書の圖を見て母様に其説明をしきりと尋ねる。むづかしとはおもひましたが偽はるのもあしかるべしと其お話をあらましすると世にも不思議の面地して、健「これ男なの？島田に結つてるぢやありませんか」。と成程前髪つけたるちよん鬚のよくも島田に似たる事かな。

同四月一日 父上と歸省、今頃は如何にしてなと、母は日向ぼこりの妹に添乳しつゝ思ひ出で案づる折しも父上より端書第一信、其内に、箱根山中を汽車の進行するや富士紡績の電燈煌々たり

健「あれ何？」父「紡績」健「紡績つて何？」父「糸を製しらへる所」と側の人、健一が洋服を指さし、「是を製らへる所です」と健「是は糸ぢやない、毛だ」と側の人「然然」。

同六月八日 羽根田へ蒲田のかへりを家族舉りての散策、都の子には珍らしいものゝみの中に潑刺たる魚が最も目につきました、晝食中健「アラお刺身が泳でゐる」と其池の縁に金魚が泳いでゐましたこれを見ても折節は自然に近かつかじめる必要があらうと思ひます。

同十月一日 健一は祖父様がりお泊りに行きました。伯母様より報告の端書のはしに健「お客様は誰？」伯母「新聞記者よ」健「さう新聞貰つて來やうや」といひながら、そつとお座敷をのぞいたが健「汽車の付てる新聞なんか無かつてよ」と折節此様なおのが経験した事のみで判断されるので母も困り切る無理をさく事がございます。其翌年八月の事でした小田原に祖父様一家族が

避暑しておゐるところへ母と一緒に行きました。早速お膳が出る。まだ御馳走が運ばれないので一寸飛乗つた、すると伯母様が「お膳に乗るものではありませぬよ」ちよつと揺つて見ながら健「さう……でもガタ／＼しませぬよ」と我家のお膳の恥をさらされてしまつた。其日の事夕方二つ下なる妹の松子、蚊のぶん／＼室内に入つて來るのを見て「ア、天井が鳴つて來た」。奇想天外より落つとはこのことか。

十一月四日 觀兵式寫眞新聞にある。嘩かし歡ぶならんと母は健一に「世早く入らつしやい觀兵式のお寫眞見せませう」といへば松子はまじらぬ舌で「松觀兵式がお車に乗て來ますよ」と自分も一つぱし大人振つた。兄は又兄顔して「健「ヤア可笑しいな觀兵式つて綺麗なことをいふのにねー」と折節朝げの父様はおなかを抱へてお笑ひ。此七年に積る日記を繰りかへしながら何ともいへぬ教訓をさとする様におぼえて、ますます母親の任重きを感じます。